

ターバンのインド人



ヒンドゥ教の聖地のひとつ、ハリドワールの大通り。この先に聖河ガンガーが流れていて、そこで沐浴をした。頭の上を水が流れた。

ターバン即インド人と思われているようだが、あれはシク教徒のかぶり物である。二〇〇二年でのインドの推定人口は十億四九〇〇万人、ヒンドゥー教が八十%、イスラム教が十四%、シク教は二%である。

二〇〇三年の六月、インドの大学（ガルワールヒマラヤ地域の標高一五〇〇メートルにあるテリー大学）から招待を受けて、環境に関する会議で自然放射線について報告を行った。五度目のインドであった。

ニューデリーから列車で約五時間、その後バスに乗り換えて、途中雨になりおまけに雷まで鳴って開催地の大学までバスは何度も峠を越えて延々と登っていった。目的地に着いたときは外は真つ暗であった。ずいぶん遠くまで来たと思った。

頼まれた講演は無事済みますことが出来た。発表後の休憩時間、いろんな人が話しかけてくる、日本に来たことのある人、国際会議で日本人を見たことのある人、そのどちらでもない人。こんなときは国際的な会議に来てつくづくよかったと思う。

こちらもいろいろ訊きたいことがあるので、紅茶を飲んでいる人に、失礼な質問だったら勘弁して下さいと断って話しかける。

「ターバンは暑くないのか」

「慣れているので暑くない。綿で風通しもいい。日射も防いでくれる」

「寝るときはどうするのか」

「とる」

「色はどんな色でもいいのか」

「シャツに合う色を選んでいる。何色でもいい。どんな色も宗教上問題はない」

かれは薄いピンのターバンをしている。

「シク教徒は必ずかぶらなければならぬと聞いているが」

「そこいる友人はシク教徒だが、ほら、かぶっていないだろう。彼はモダンである」

「するとあなたは伝統的なのか」

「私は伝統的である。どちらがいいとおまえは考えるか」

逆に尋ねられた。分からないと答える。

「シク教徒はひげを剃ってはいけないと聞いたが、切ってもいけないのか」

「切ってもいけない」

モダンな友人が口を挟む。

「私は、見ても分かるように切っている」

「両親は反対しないのか」

「両親はフリーだった」

フリーでモダンなシク教徒とは夕食後再開することになる。

大学の食堂で夕食を取っていたらインドの友人がこの上の階にウイスキーがあるから行こうと誘ってくれた。そこに例の彼が学会参加者四、五名といっしょにいた。南インドの有名なウイスキーを持ってきたから飲めと私に勧められる。ニューデリーでアルコールを買うとき、けっこう厳しかったので、意外な感じがした。異国のアルコールが喉をとる。ハッピーであった。

帰国してシク教の本を読んでいたらシク教の教理の中に、人々に遍く食事を施すという意味の「ランガの制度」があるとあったが、彼のウイスキーもそれだったのか。飲酒については、原則ノーらしいが、それがどれほど厳格な戒律なのか知らない。

(二〇〇六年二月二八日)